

向き合うふたつの博物館 —公共空間の共有をめざして

野林 厚志 (のばやし あつし)

本館文化資源研究センター



国立故宮博物院、順益台湾
原住民博物館／台湾

台湾の博物館と聞いて、故宮(正式名称は国立故宮博物院)を思い浮かべる人は多いであろう。一九六五年、文化大革命の端緒とされる姚文元(ヤウウェンユェン)の評論が上海で発表された二日後、台北の郊外に故宮は完成した。さまざまな経緯の末、北京の紫禁城から台北まで運ばれた中国王朝の膨大なコレクションが、台湾はもとより世界を代表する博物館である故宮の根幹をなしてきた。

とはいえ、台湾の民主化、それにとまなう台湾・中国関係の複雑化は、数多くの「宝物」をして中華文明を雄弁に語らしめてきた故宮の役割に少なからず影響を与えた。結果、故宮は約一〇年間の準備期間を経て、二〇〇六年一月に大規模なリニューアルを完成させた。来館者が入りやすい出入口、各国語への対応、中国史偏重から資料重視の展示構成、子どものための展示場とマルチメディア情報展示の整備計画等、来館者の存在を強く意識した変更が随所に取り入れられていった。リニューアルの前と後に故宮を訪れている筆者に言わせれば、「貴重な文物を見せてやる」から「大切な資料を見てもらう」へ態度が変化したということである。じっくりと時間をかけたリニューアルの結論は来館者を大切にすることだったのだろう。

文明の押し売りをやめた故宮から、道路をはさみ徒歩五分くらいの場所に台湾の別の顔を見せてくれる博物館がある。順益台湾原住民博物館(以下順益)である。順益は台湾の自動車関連企業のメセナ活動で作られた博物館で、先住民である台湾原住民の文化や社会の様子を、展示や社会連携活動とおして伝えていくことを目的として一九九六年に開館した。常設展示だけでなく、企画展示会やDIY教室(ワークショップ)を重ね、来館者重視の姿勢を一貫して取り続けてきた。また、原住民学生への奨学金の支給、研究機関や大学への研究費の寄

の文化として漢文化をかかげることは大陸中国との関係において微妙なニュアンスをもつ。一方で、原住民文化は台湾で生まれ育まれてきたという考え方は社会的なかでも受け入れられやすい。そういった考えが政治目的にも利用されることもあるが、長いあいだ、マイノリティとして社会に位置づけられてきた台湾原住民が、台湾アイデンティティの一翼を担うようになったことは社会の変化を如実にあらわしている。

常の生活用具を中心に伝える企業メセナの順益。ある意味、非常に対照的なふたつの博物館は、両館をシャトルバスでつなぎ、共通の入場券を発行する計画を進めている。一人でも多くの人にどちらの博物館も見てもらいたい。一人でも多くの人が集える公共空間を共有しよう。そんな実践的な試みが向き合うふたつの博物館のあいだではじまっている。「博物館や学芸員の権威性」「民族博物館のもつ排他性」といった議論とは縁遠い、博物館の現場に生きる人たちの本音をそこに感じることができる。

付、原住民関連出版物の発行など、原住民文化の振興や研究に与えた影響や貢献は大きい。

人口の大半を漢族系の住人がしめるものの、台湾独自

順益の游浩乙(ユウ・エリック)館長(左)と松園万亀雄館長。
順益と民博とは学術協定を締結しており、松園館長が
原住民博物館を訪問した(順益台湾原住民博物館提供)

中華文明は今も故宮のテーマのひとつである



故宮と順益の
共通入場券
(順益台湾原住民
博物館提供)

國立故宮博物院 國立順益台灣原住民博物館
NO. 123456 普通參觀券 (成人適用)

NT\$250
國立故宮博物院 國立順益台灣原住民博物館
NATIONAL PALACE MUSEUM &
SHUNYI MUSEUM OF FANGANGSIAN ABORIGINES
GENERAL ADMISSION
國立故宮博物院 國立順益台灣原住民博物館

國立故宮博物院 國立順益台灣原住民博物館
NO. 123456 普通參觀券 (成人適用)

國立故宮博物院 國立順益台灣原住民博物館
普通參觀券 (行政院)
NO. 123456 250